☆年間第１５主日（７月１２日）の聖書朗読☆※主任司祭からの解説があります。

第一朗読　（イザヤの預言　５５章１０～１１節）

主は言われる。
雨も雪も、ひとたび天から降れば
むなしく天に戻ることはない。
それは大地を潤し、芽を出させ、生い茂らせ
種蒔く人には種を与え、食べる人には糧を与える。
そのように、わたしの口から出るわたしの言葉も
むなしくは、わたしのもとに戻らない。
それはわたしの望むことを成し遂げ
わたしが与えた使命を必ず果たす。

第二朗読（使徒パウロのローマの教会への手紙　８章１８～２３節）

皆さん、現在の苦しみは、将来わたしたちに現されるはずの栄光に比べると、 取るに足りないとわたしは思います。 被造物は、神の子たちの現れるのを切に待ち望んでいます。 被造物は虚無に服していますが、それは、自分の意志によるものではなく、 服従させた方の意志によるものであり、同時に希望も持っています。 つまり、被造物も、いつか滅びへの隷属から解放されて、 神の子供たちの栄光に輝く自由にあずかれるからです。 被造物がすべて今日まで、共にうめき、共に産みの苦しみを味わっていることを、わたしたちは知っています。 被造物だけでなく、“霊”の初穂をいただいているわたしたちも、 神の子とされること、つまり、体の贖われることを、 心の中でうめきながら待ち望んでいます。

福音朗読　（マタイよる福音書　１３章 １～９節）

その日、イエスは家を出て、湖のほとりに座っておられた。 すると、大勢群衆がそばに集まって来たので、 イエスは舟に乗って腰を下ろされた。群衆は皆岸辺に立っていた。 イエスはたとえを用いて彼らに多くのことを語られた。「種を蒔く人が種蒔きに出て行った。 蒔いている間に、ある種は道端に落ち、鳥が来て食べてしまった。 ほかの種は、石だらけで土の少ない所に落ち、 そこは土が浅いのですぐ芽を出した。 しかし、日が昇ると焼けて、根がないために枯れてしまった。 ほかの種は茨の間に落ち、茨が伸びてそれをふさいでしまった。 ところが、ほかの種は、良い土地に落ち、実を結んで、 あるものは百倍、あるものは六十倍、あるものは三十倍にもなった。耳のある者は聞きなさい。」

朗読解説　―主任司祭より皆様へ―

梅雨の終盤、毎日雨模様ですが、皆様お元気でいらっしゃいますか。九州の各地では大雨の災害が発生して、川の氾濫で多くの人が亡くなられています。お祈りいたしましょう。九州・福岡司教区の新しい司教様（ヨセフ・アベイヤ司教）からは支援の依頼が来ております。どうぞ兄弟的なご支援をお願いします。

さて、今日の主日のミサは、イエスがガリラヤ湖の水辺に座っておられる福音が読まれます。湖の風を感じながらイエスは何を感じておられたのでしょうか。これからは夏のシーズンで私たちもどこか暑さを避けて出かけたいところですが、イエスの周りには多くの人々がやってきます。マスクもソーシャル・ディスタンスもない時代、イエスは神の国の秘密を優しく語られました。

第一朗読　（イザヤの預言　５５章１０～１１節

この豪雨の季節にあまりふさわしくありませんが、雨や雪の話が出てきます。その雨も雪も本来は人のために神が作られ、人はその恩恵に与れるようになっていたのです。今は気候変動によって災害の原因になったりしていますが、雨や雪はありがたい存在なのです。恵みの源なのです。その降る雨や雪のように、神の言葉は人々を養うと、イザヤは語ります。大地がゆっくりと雨や雪を受け止めていき実りをもたらすように、私たちも神の言葉をかみしめ味わいながら過ごすときに、そこの神の恵みがあることを感じ、実りを味わうことでしょう。このイザヤの預言の朗読は、福音の「種まきのたとえ話の導入になっています。

第二朗読（使徒パウロのローマの教会への手紙　８章１８～２３節）

パウロは人間の現在の苦しみについて述べています。私たちはどうしても目の前の苦しみ、災難についてのみ考えがちですが、パウロは将来に目を向けるよう、将来受けるであろう栄光を考えるように勧めています。「私たちはいつか滅びへの隷属から解放されて、神の子の栄光に輝く自由に与れるからです」と述べています。私たちは今、コロナに呻き、水害に喘ぎ、人権侵害やいじめそして自由の抑圧に直面しています。イエスも言われています。「最後まで耐え忍ぶ人は幸い」と。

福音朗読　（マタイよる福音書　１３章　１～９節）

今日の福音はちょっと長いので、短い方の福音でお話しします。ガリラヤ湖の水辺に座っておられたイエスは、大勢の人々がやってきたので舟を出してもらい、湖に浮かべた舟から話をされています。そしてその話は湖に関する話ではなく、畑などの播かれる植物の種の成長の違いについて話されたのです。もう何度も聞いた話、たとえ話ですが、いつも新しい発見をします。イエスはナザレでマリアやヨセフと過ごされた少年・青年期に

種がどのように育つのかの不思議を学ばれたのだと思います。学びは若い時代にだけ必要なことではありませんが、若い時代の発見や経験はとても大事なことがわかります。イエスはこの種まきのたとえで何を語りたかったのでしょうか。弟子たちにはなかなか難しかったようです。それもそのはず、弟子たちは漁師であったり、徴税人であったり愛国主義的な活動をしていたりと田畑を耕す人たちは少なかったようです。ですから、歩く道々にまかれてしまった食べ物の種が人々に踏まれたり、藪に覆いふさがれたり、日照りにあったりして枯れてしまったところを見ることもなかったのでしょう。イエスの物事の観察眼のすごさが胸を打ちます。このようなたとえ話を通して、隠された天の国の秘密が打ち明けられるのです。物事の真理を直接に表現するよりも、譬えをもって話す方が含蓄があり受け取りやすいのです。今日の種まきのたとえは、漁師の人にはわかりにくかったかもしれませんが、農業を営む人たちにはきっとわかり易かったのではないでしょう。漁師たちにはどのようなたとえ話をされるのか、イエスに聞いてみたい気がします。神の言葉はただ漫然と聞いていてはだめで、聞く側の心をふさわしく耕し、肥料をやり、雑草を抜き水をやるなどの心掛け、種の成長を見守る世話が大切なのだということです。
チコちゃんの「ボーッと生きているんじゃねーよ！！！」ということでしょうか。

カトリック足立教会
主任司祭　野口重光